

コレクション展（常設展）「節子を詠む」関連行事

短歌ポスト「三岸節子を詠む」10周年記念講演
『短歌と絵画 —短歌ポストから見えてくるもの—』
を開催しました

日 時 平成30年12月22日(土) 午後1時30分～3時
受講者 32名
講 師 小塩卓哉氏（中部日本歌人会顧問、短歌ポスト選者）

平成19年度から始まった、来館者のみなさまに三岸節子や節子作品、美術館について短歌を詠んでいただき、半年ごとに優秀作品を発表する短歌ポスト「三岸節子を詠む」。講師の小塩先生には、開始当初から選者を務めていただいています。

現在開催中のコレクション展「節子を詠む」（10月6日～2019年1月14日）では、開館20周年と短歌ポスト10周年を記念し、歴代入選短歌全62首と、そこに詠まれた節子作品とをあわせて展示しています。今回の記念講演では、小塩先生に絵画と短歌のディープな関係性について考察していただきました。



先生によれば、美術作品を歌うときの三要素は「全体を見る」「細部を見る」「別の意味を付加する」とのこと。例えば三岸節子作《月夜の縞馬》を詠んだ「月の下からまる縞をほどき合う二頭の馬よ駆けてゆけ、さあ」という歌では、地面に絡まり合う縞模様（＝細部）に着目されていることがよくわかります。

このように実際に世界の名画や節子作品を題材に詠まれた短歌を例に挙げながら、わかりやすく分析・解説していただきました。

受講者のほとんどの方が講演終了後そのまま常設展示室に向かい、さっそく短歌に挑戦されていました。その日の短歌ポストは応募作品でいっぱいでした。

短歌ポストは随時受付をしており、入選者には展覧会招待券などの記念品をプレゼントしています。

壺井栄や佐多稲子ら文学者との交流も深く、自身も随筆をつづるなど、言葉に対しても鋭い感覚をもっていたと言われる三岸節子。節子の絵画は短歌など文学・文芸に非常に高い親和性を有しているといえるでしょう。みなさんも節子作品を鑑賞すると、自然と頭の中に歌が浮かんでくるかもしれませんね。（学芸員補 長岡）

